

上関地点 2021年度 環境監視調査結果について(報告書の概要)

2021年度の水質調査結果は、管理目標値を満足していた。

陸生、海生生物については、過去の調査結果と比較して顕著な変化は見られなかった。

項目		調査時期	調査結果概要		
水質	陸域工事排水の水質	月1回	水素イオン濃度、浮遊物質量ともに管理目標値内であった。		
			項目	調査結果	管理目標値
			水素イオン濃度	7.0~7.5	5.0以上9.0以下
			浮遊物質量 (日平均値)	6mg/L 以下	150mg/L 以下
陸生生物	ハヤブサ	4月:2回/月 6月:1回/月 2月:1回/月 3月:2回/月 (5月2回、6月1回 中止) ^{※1}	2020年度末に抱卵行動、4月に給餌行動を確認したものの、5月の2回及び6月前半の調査が実施できず、本年度は繁殖成否の最終確認はできなかった。 なお、各調査においては親鳥の生息を確認している。		写真1
	植生	春・夏 各1回 5月10、11日 7月20、21日	イヨカズラを7箇所18株、ジュウニヒトエを48箇所238株、イヌノフグリを3箇所64株、ギンランを1箇所1株、キンランを1箇所1株、クロムヨウランを2箇所2株、ビヤクシンを1箇所1株確認した。		写真2
海生生物	潮間帯生物	年2回 4月14、15日 11月18、19日	植物ではヒジキ、サビ亜科など59種、動物ではイボニシ、カメノテなど45種を確認した。 【確認種数】・植物:春55種、秋30種 ・動物:春39種、秋43種		写真3
	海藻草類		ノコギリモク、サビ亜科など46種を確認した。 【確認種数】春43種、秋24種		
	底生生物		アカウニ、ムラサキウニなど5種を確認した。 【確認種数】春4種、秋4種		
生物	スナメリ	3月~10月 ^{※3} (週1回・計26日) (5月、8月各1回、6月、9月各2回 中止) ^{※1}	確認回数は計59回、延べ144頭を確認した。		
	カクメイ科等の貝類	年4回 6月23、24日 10月7~9日 ^{※2} 11月1~3日 3月16、17日	カクメイ科等の貝類は確認されなかった。 タイドプール ^{※4} 2箇所のうち1箇所は、2010年に岩盤の崩落が確認されて以降、引き続き崩落の恐れがあるため、1箇所で調査を実施した。		

※1 新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う中止

※2 新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から夏季調査を8月から10月へ延期

※3 スナメリ調査は2021年3月から開始

※4 タイドプール:干潮時に海辺の岩場にできる潮だまり

【参考】

《環境監視計画以外の環境調査》

- カムリウミスズメ(写真4)

2021年度調査の結果、計画地点周辺海域において5回延べ10個体を確認した。

計画地点周辺海域において広く確認されたが、工事施行区域内での出現はなかった。

- カラスバト(写真5)
2021年度調査の結果、計画地点において、4月、10月に鳴き声を確認した。
なお、鼻線島においては11月、1月に姿、4月、10月、12月、3月に姿および鳴き声を確認した。
- 鼻線島におけるミサゴの繁殖状況について(写真6)
2021年6月、7月に巣立ち後の幼鳥3羽を確認できたことから繁殖は成功した。
今後も繁殖が継続して行われる可能性があるため、引き続きの生息状況を確認する。
- 鼻線島におけるクロサギの繁殖状況について(写真7)
繁殖行動は確認できなかったが、2021年6月に鼻線島の岩礁で幼鳥1羽を確認した。
今後、繁殖が行われる可能性があるため、引き続きの生息状況を確認する。

《その他》

- カクメイ科等の貝類調査において、11月にシラギク(環境省レッドデータブック(準絶滅危惧)を確認した。(写真8)

【調査写真】

写真1:ハヤブサ



(左:親鳥(雄)、右:親鳥(雌)(2022年3月29日撮影))

写真2:植生



イヨカズラ



ジュウニヒトエ



イヌノフグリ



キンラン



ギンラン



クロムヨウラン



ビャクシン

写真3:海生生物



イシゲ



カメノテ



ノギリモク



アカウニ

写真4:カンムリウミスズメ



(3月14日 天田島の南東)

写真5:カラスバト



(12月15日 鼻線島)

写真6:ミサゴ



(7月6日 鼻線島)

写真7:クロサギ



(6月22日 鼻線島)

写真8:シラギク



(11月1日 タイドプール)

環境監視委員会 委員からのコメント

【2021年度環境監視調査結果について】

項目	主なコメント
水質 (陸域工事排水)	水質調査結果は管理目標値内であり、大きな変化は見られておらず、環境保全措置が適切に実施されている。
陸生生物 (ハヤブサ)	新型コロナウイルス感染防止対策により巣立ちの時期に調査ができていないことから、調査結果としては繁殖成否の最終確認はできていないが、親鳥の生息は確認しており問題ない。
陸生生物 (植生)	経年変化は過年度のデータから見ても自然変動の範囲内であり、工事のない状況においても自然要因による増減が確認されている。
海生生物 (潮間帯生物、海藻草類、 底生生物)	経年比較すると、出現種数については自然変動による多少の増減が見られており、主な出現種の上位種に変動はあるが過年度から確認されている種であり、顕著な変化は見られない。
海生生物 (スナメリ)	経年比較すると、1回確認当たりの頭数は過年度調査とほぼ同等であることが確認でき、顕著な変化は見られていない。
海生生物 (カクメイ科等の貝類)	カクメイ科の貝類は確認されていないが、タイドプールの水質、底質については過年度調査の変動範囲内で、顕著な変化は見られないため、環境保全上、問題ない。

【その他について】

項目	主なコメント
ミサゴ	2021年度は、幼鳥の巣立ちを確認しており、引き続き生息状況を確認する必要がある。
クロサギ	2021年度は、鼻繰島で幼鳥を確認しており、引き続き生息状況を確認する必要がある。
シラギク	シラギク的环境保全措置等について、確認されたタイドプールは埋立てしないなど、海生生物と同様の環境保全措置で問題ない。

以 上